

No. 6



F. OKADA

火

戦闘機が一機

風もない雲もないぬけるような青空から
落ちた

そして山が

メラメラと燃え上がった

それを見たひとりの女は
自分の人生をそこに重ねていた

これだけカラカラの空気ならば

この山火事はあと五千年はおさまるまい
あの山にはミカン畑があったのだが

五千年経ったあとで

すべたが終わった荒廃した土地に

真っ黒に焼け出されたミカンが

転がっているのだろうか

戦闘機が一機

風もない雲もないかなしいばかりの青空から
落ちた

そして山が

メラメラと燃え上がった

なにもない田舎町で

なにもない青色を背に

メラメラと燃え続けた

ある春の日

ノース・カントリー

りんごをそだてるりんごをそだてる農園の中
りんごをみのらすりんごをみのらす雪の下の枝
家に帰れば暖炉の横で
きみがアルファベットを覚えている

りんごをかじってりんごをかじって冬の散歩道
りんごをむいてはりんごをむいては寒空の下
足元にたまってゆく赤色の皮が
ソリに変わってどこかへすべってゆく

トロイカの後部座席に

あふれんばかりのりんごを乗せて

A B Cを歌いながら

ピカピカにみがきあげて

りんごをそだてるりんごをそだてる農園の中
りんごをみのらすりんごをみのらす雪の下の枝
りんごをかじってりんごをかじって冬の散歩道
りんごをむいてはりんごをむいては寒空の下

ぺんぺん草

太陽はあんなにもとほいところにある
俺は地べたにへばりついている
じめじめ、べたべた、露がおりて
まったく　こんなところ嫌だ！

吹いてくる風は風で
からからに乾いてけつかる
風になびいて草むらはゆれる
右へ左へゆれてやがるよ

地べたにしばみつくおれ
根をほり葉っぱを伸ばしては
やい、太陽よ！

どれだけとほいところへいるつもりだ

おれの融通のきかぬ自我が
世間を打ち負かすその日まで
太陽はあんなにもとほいところに
あるのだろう

休日

食卓の上には

たくあん ふたきれ

シヨーユさし

フライパンの上には

魚が二匹

生活のおいがただよってくる

ビールの景品のコップにかくれて

幸せ者のふりをして

腹をすこしだけ

すかしてみよう

なんということもない

都市の秋口

お仕事

真ひるのプラットホームで
たばこを　ぷかり　ぷかり　ぷかり
ふかす

田舎町のふみ切りを
埃まみれのふみ切りを
ゴーと電車が過ぎるのだ
駅長さん　電車が来ますよ
船なら港で漕ぎなさい

あめりか製のドロップを
舌の上でころころと転がしているきみ
へたくそな絵を街いっばいに描きなぐっては
きみは笑ってみせるのだ

午後三時の紅茶は
スチール缶の中にうづくまる
うづくまったなりに　ぼくを見上げ
しゃがれ声で　ささやくのだ
お客さん　電車が来ますよ
白癡の内側へ下がりにさい

お嬢さん
電車が来ますよ
と言いながらぼくは　レールがたごとと鳴る音を食べる
なにもかも　空も山も
田んぼも道も　この駅も
そしてぼくも　それからきみも
ぜんぶぜんぶこの

晴れた昼下がりの光にとけこんで
思ひ出になってしまおうと思うのです
駅長さん　電車が来ますよ
お仕事の間ですよ

あなたが飛び出す街角で

一陣の風が

吹きぬけていくのみである

赤子を背負った母親も

死にももの狂いで駆けぬける

この街の赤色は

太陽を映しているから

あとの処理はあんたがやれ

あたしや初めてなもんでよう知らん

家の玄関から

路地裏のキラメキから

進入禁止の標識の下から

あなたが飛び出してくる

胸騒ぎがするマチカドで

浮浪者たちがセケンバナシ

なぜ私が代金を

なぜ喰ってもいない昼食代を私が……

経費で落とせないのだろうか

炊飯器の中から

ハジケル夜の火花から

1LDKのアパートから

あなたが飛び出してくる

あなたが飛び出してくる